



Curriculum Center for Teachers  
Tokyo Gakugei Univ.

Creative Curricula & Teaching  
Newsletter

国立大学法人東京学芸大学  
教員養成カリキュラム開発研究センターニュースレター  
第15号 2015年2月1日 発行

## 公開シンポジウム「東日本大震災と学校教育 —放射能問題に取り組む教育実践—」を開催しました

**東** 京電力福島第一原子力発電所の事故発生からまもなく4年が経ちます。この事故が国内外に与えた衝撃や混乱の記憶は時間の経過とともに薄れつつありますが、放射線の科学やエネルギー政策などは、依然として日本の学校が視野の外に置くことができないテーマです。

教員養成カリキュラム開発研究センターは、昨年11月30日、原発事故によって放出された放射能の問題に取り組む教育実践をテーマにシンポジウムを開催しました。シンポジストとして南相馬市立小学校教諭の白木次男氏、東京都内私立中学・高校講師の大矢英世氏、東京大学教授の小玉重夫氏、そしてコメンテーターとして帝京大学教授の三石初雄氏を迎え、実践と理論の両面から問題提起をしていただきました。

まず白木氏からは、震災後に児童が書いた作文や詩などをもとにした劇制作についてお話をいただきました。ご報告とあわせて上映された校内学習発表会の上演時の映像からは、その劇の中で、子どもたちが経験した原発災害後の親しい人たちとの別離や、避難による人口減少に直面する南相馬市での雇用や医療体制をめぐる諸問題が、彼らの視点から語られていることがわかりました。白木氏によれば、この取り組みは子どもの家庭に向けられたものということで、保護者と子どもがそれぞれの将来の生き方について語り合い、厳しい現実のなかでも希望を見出してほしいという教員の願いが込められた授業実践だったことが紹介されました。

大矢氏は、東京都内の私立中学・高校（男子校）の家庭科の授業で行った2つの実践を報告されました。まず2012年度に中学2年生が、原発災害と食の安全をテーマに、立場の異なる人々が一堂に会するという模擬市民会議の形式で、ロールプレイングによる討論を行った事例が取り上げられました。生徒は、福島の生産者や幼い子どもを持つ親、政府のメンバー、東京電力の社員などを演じることを通してそれぞれの主張と争点を知り、原発災害を自分の生活に関係した問題として捉えることができるようになったということです。同様の成果は、2013年度に高校2年生と福島の高校生との書面



による交流学习からも得られたといいます。東京の生徒が持っていた「原発災害は他人事」という意識に大きな変化をもたらしたのは、「福島の女性と友達になったり、結婚できますか」といった福島の高校生からの率直な質問だったことが指摘されました。

最後に小玉氏は、低線量被曝の身体への影響のような専門家のあいだでも意見が分かれ、科学的に未解明の部分を含む問題の争点を生徒が学校で学ぶことの必要性を訴えました。論争的なテーマを学校のなかで取り上げるのは、小玉氏によれば、市民の政治的な判断能力を育て、社会参加を促すシチズンシップ教育にとって極めて重要なことだということです。放射線リスクをめぐる判断に関して、生徒あるいは市民は専門家に依存するのではなく、専門家との対話を通して自ら行っていくことが求められると強調されました。

以上の3氏からの報告を受け、コメンテーターの三石氏は、児童生徒が社会的・科学的な諸問題について主体的に考える授業の前提条件として、教員が基礎的な科学的知識を適切に教える力を備えていることと、教科書に書かれていない教育課題に教員が積極的に取り組むための校内研修等の支援体制が整っていること、の2点を指摘しました。

報告に続いて行われた質疑応答を含め、このシンポジウムを通して、放射線のリスクに代表される原発災害の問題は、今日の学校が正面から取り組むべき教育内容であるという理解が共有されました。加えて、これらのテーマが、児童生徒に理性的・自律的に判断したり選択したりする力を獲得させるという学校教育の課題に対して有効であるということでも認識の一致が見られました。（上杉 嘉見）

# 北京から客員教授が着任しました

教員養成カリキュラム開発研究センターは、2014年度の外国人客員教授として、首都師範大学の夏鵬翔副教授を昨年11月にお迎えしました。本年5月まで日本の初等教育や教員養成について研究されるほか、中国の初等教員養成等をテーマにご講演をいただく予定です(詳細は4頁参照)。

**東** 京学芸大学とはご縁が深く、私は1993～1995年に修士課程に在籍し、2004～2005年には外国人研究者として滞在していました。そしてこのたび教員養成カリキュラム開発研究センターに外国人客員教授として招聘していただき、半年間にわたりセンターの先生方と一緒に仕事をすることになりました。東京学芸大学で3度目の研究の機会が得られたことをとてもうれしく思います。

私は、大学時代は日本語を勉強し、修士課程では社会教育を専攻していました。小林文人先生のご指導の下、日本の公民館や生涯学習について研究し、とても充実した楽しい留学生活を送りました。

1999年に、運良く設立間もない首都師範大学初等教育学院に就職し、初等教育とその教員養成に没頭することになりました。中国ではそれまで初等教員養成は専門学校相当の機関で行われており、4年制大学にレベルアップしたのはまさにこの1999年のことです。いま思うと、私は初等教育研究のために帰国したようなものです。就職後は、本学院での仕事のかたわら、北京市内の小学校を見学したり、初等教員の研修の講師を務めたりしてきました。今年で15年目になります。

これまで初等教員養成に携わってきて、いちばん感心するのは、児童のかわいい笑顔とその熱心な勉強ぶり、そして小学校の教員が一生懸命仕事をしている姿です。ただ、中国の学校は学ぶ量がとても多く、小学校も例外ではありません。学歴社会が生んだ成績第一という厳しい環境のもと、子どもはたいへん苦労しています。こうしたなか、本学院は、小学校のあるべき姿は何か、いかにして子どもらしい学校生活を過ごさせるか、そしてそのために小学校の教員は何をすべきか、といった問題を追究しています。

以上と関連して、この数年、「学士卒の小学校教員の研究能力について」「小学校教員としての資質」などの教師教育に関する研究プロジェクトに参加してきましたが、なかでも特に有意義だったのは、中国教育部の委託プロジェクトである小学校教員の専門基準の策定に携わったことでした。

また、創価大学教職大学院の海外研修の学生たちを毎秋本学院に迎えて、北京市内の小学校で授業見学や授業研究を行っています。たとえば同じ内容を日中の教員がそれぞれ教えるという試みを通して、両国の教育理念や教科教育法を比較することができ、私自



身の教師教育実践にも役立っています。これらの経験をもとに書いた論文として、「日中の小学校の道徳教育の比較研究」「日本における小学生の表現力の養成について」などを挙げるすることができます。

もうひとつの研究テーマは「生命教育」です。近年、生命教育は中国の学校教育に普及しており、特に小中学校では広範に実施されています。生命教育では、子どもたちに命の尊さや人々に対する思いやりなどを教えるのはいうまでもなく、小学校教員自身が児童生徒の「生命性」を正しく認識するよう求められています。すなわち教員は、児童生徒の個性を抑えつけるのではなく、それを尊重して一人ひとりの子どもに合った教育方法をとることができなければなりません。その意味で、生命教育は小学生よりも小学校教員にこそ必要とされています。生命教育は、道徳の授業だけでなく各教科においても実施するよう提唱され、小学校教員の研修の主要なテーマの1つにもなっています。ちなみに、2011年には初等教育学院のスタッフを中心に「児童生命と道徳教育研究センター」が設立され、生命教育の理念や実践について研究を展開しています。私もその一員として小学校での生命教育実践の普及に取り組んでいるところです。

今回、本センターの客員教授となる機会をいただき、誠に感謝しております。この半年間、日中両国における教員養成の比較や、日本の初等教育などについて研究を続け、両国にとって参考となるもの、特に中国の教育に役立つものを見つけ出したいと考えております。関係者の皆さまには、いろいろお世話になりますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

夏 鵬翔(シャ・ポンシャン)  
首都師範大学初等教育学院副教授

# 教師教育における「実践化」「高度化」の 今日的課題性の検証を

カリキュラムセンターでは、2014年度国内客員教授の三石初雄氏とともに、教職大学院改革をテーマに毎月研究会を行っています。以下、三石氏にこのテーマをめぐる最新の議論を整理していただきました。

教員養成の「修士レベル化」が公的に議論されるようになり久しくなります。一昨年(2013年)の国立大学法人の「ミッションの再定義」での「新課程」ならびに既設大学院の見直しと専門職大学院(教職大学院)への移行奨励策の提示によって、その議論が収斂化されているかを見えます。2014年12月に開催された日本教職大学院協会研究大会では、既設の19教職大学院に加えて、2015年度開設2、2016年度開設18大学院ということが紹介されてもいます。このような動きは、戦後日本の教員養成ならびに現職教育の制度とカリキュラム・内容、実施形態等々の大きな転換点を想起させるものです。

教員養成系大学では、2000年に入って①教員養成カリキュラムにおける教育実践関連科目の位置づけ(モデル・カリキュラム)、②学士課程と修士課程・専門職課程のカリキュラムと到達目標の位置と内容(「スタンダード」と「質保障」)等の課題について議論をしてきました。そこで問われていたのは、今日的な教員養成・教師教育の在り方であり、その中で問われてきた概念としての「実践」と「高度化」の検討という課題があげられるかと思えます。

教師教育の専門学会である日本教師教育学会では、①いま何故に教師教育の「高度化」が求められるのか、その背景(教育政策動向)や「高度化」

の内実とはいったい何であるのか、②教師教育における「教職専門性」「教育実践性」「熟達化過程」「教師の教養と人間性」「同僚性と協働性」等の概念整理、③教職以外の専門職教育における「高度化」への対応状況に学び、教師教育を相対化の課題、④学習主体(学生)にとって、あるいは「教育・学校現場」から見た教師教育の「高度化」の必要性や妥当性等々の検討に目を向けています。

そのような中で、教師側から見た研修と教職熟達化の過程を丹念に縦断研究したものや、学部での学び(到達点)と「大学院知」との違い、「修士論文」と「課題研究」の性質上の違いについての考察、国際比較教育研究の視角から検討(TALIS)等の分野からの考察もなされてきています。

このような、いわば戦後教員養成の政策と高等教育機関での教員養成・教師教育の取り組みの現状と課題を検証することが求められているように思います。高等教育機関関係者と教師・学校・教育委員会等々の関係者間でのオーセンティックな「教育における実践的指導力」の現状認識の共有化を図る中で進めていくことが求められているように思います。

(三石 初雄・帝京大学教授／東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター国内客員教授)

## 教師教育の術語⑮

### 「14条特例」

日本の大学院設置基準第14条では「教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間又は時期において授業又は研究指導を行う等の適当な方法により教育を行うことができる」と定められている。社会人学生を想定したカリキュラムの柔軟な取り扱いの規定である。

教育系大学の大学院における社会人学生のほとんどは現職教員である。東京学芸大学の大学院では1990年代からカリキュラムの整備を行い、1年間で修士課程の必要単位の大半を取得可能にしている。1997年からこの「特例」を用いて教育委員会から派遣されてくる学生の受け入れを始め、彼らは1年間だけ現場を離れて大学院の授業を受け、2年目は学校に勤務しながら休日・夜間等に指導を受けて修士論文を完成させるというスタイルで学んでいる。

(岩田 康之)



## 日中共同研究短信

3年間の予定で継続してきた東北師範大学との共同研究の総括協議のため、12月28日から31日という年の瀬も押し詰まった日程で訪中した。当地では元旦こそ祝日であるものの「正月」は旧暦で祝うとのことで、この時期は通常業務体制である。今回の訪問では教育実習を含む教員養成カリキュラムに関する報告書の取りまとめについて協議した他に、大学附属学校同士の交流の可能性も話題に上った。協議2日目にはそれに関する打診も兼ねて東北師範大学附属の中学校と小学校を訪問した。中国の学校は、特に都市部では一般に規模が大きいと言われる。訪問した附属中学校も1学年26クラス、附属小学校は1学年7~8クラスという大規模校である。この附属小では十分な幅の廊下と組み合わせられたオープンタイプの教室、多種多様な特別教室の配置と什器備品の充実に目をみはった。かつては入学者の選抜を行っていたが今日では所定の学区内の児童生徒が就学する公立学校システムの一部に組み込まれているとのことであったが、投入されている公費の質量に圧倒された。「エビデンス」を旗印に教育の費用対効果を追求する日本の文教政策からは失われた教育への無条件の期待が感じられた。

(前原 健二)



# 教師が育つ現場 第15回

東京学芸大学理科教員高度支援センターにおける  
取組みについて

中西 史

(東京学芸大学基礎自然科学講座／本センター運営委員会委員)

理科教員高度支援センター(ASCeST)は2011年10月に常置センターとなり、基礎研修部門、専門研修部門および企画・学外連携部門を構築して事業を推進しています。現職教員研修としては、実験・観察指導に必要な基礎知識と技能の獲得を目的とした基礎研修と、先端科学技術や自然環境などの現代的テーマを理解し、それを児童・生徒に分かり易く伝える教育力の育成を目的とした専門研修を行っています。また、これからの日本の理科教育とそれに携わる教員のキャリア・デベロプメントについての研究や、教員研修をテーマとしたシンポジウムの開催、その他海外からの研修チームに対する指導も行っています。研修は、ASCeST専任教員や自然科学系に所属する兼任教員、2名の特命教授(現在は元附属高等学校教諭が就任)が中心に担当していますが、来年度からは小学校の理科教育に長く携わって来られた先生方にも講師に加わっていただくことになり、現場のニーズにさらに広く応えられる体制を整えています。昨年度の事業には日本全国からのべ1300名を超える参加がありました。以下、私が担当している「植物の水の通り道」と「メダカの飼育と授業における効果的な取扱い」の研修についてご紹介します。

「植物の水の通り道」は平成20年告示の小学校学習指導要領で第6学年に追加された内容であり、教

職経験の長い教員にとってもなじみが薄く、教員同志の学び合いが難しいようです。また、教科書で扱われる「色水を根から取り込ませて道管を染める実験」は、「食紅や切り花染色剤に用いられる色素分子は細胞膜を透過せず、無傷な根では取り込まれない」という植物生理学的な常識と矛盾したものであり、「植物を大切に扱うほど実験に失敗する」という混乱を小学校現場で引き起こしています。研修では、植物における水の取り込みや蒸散に関する植物生理学的な背景を解説するとともに、附属竹早小学校において、児童が現象を素直に見つめることで「根にはフィルターの役割がある」という一歩進んだ学びにつながった実践を紹介しています。また、シリコンチューブを用いた簡易蒸散計により、植物が水を取り込む様子をリアルタイムで示し、教員自身に植物のはたらきを実感してもらい、その実感を児童の指導に活かしてもらいたいと考えています。

「メダカの飼育と授業における効果的な取扱い」は小学校5年生の「生命の連続性」の単元に関するものですが、東京都の小学校教員を対象としたアンケート調査では、知識・技術不足を理由に不安や困難を感じる教員が多い内容です。研修はメダカの飼育や観察方法の基本を子メダカへの給餌や水道水や汲み置き水、飼育容器内の水の遊離塩素濃度、硝酸濃度、pHのパックテストや試験紙による測定等を行いながら体験的に学べるよう構成しています。その後、産卵翌日から孵化直前まで1日間隔で用意された受精卵を実体顕微鏡で観察し、受精卵の中に体の構造が徐々に形成され、拍動や血流が見られるようになり、色素が沈着してゆく様子を理解します。この研修では、授業やその準備の過程で小さな命と教師や児童がどのように向き合うかという道徳的な側面も一緒に考える場となることも目指しています。

## 公開研究会のお知らせ

2015年3月11日(水)

14時30分～16時

「中国の小学校と授業づくり」

講師: 夏 鵬翔 氏(本センター  
外国人客員教授／首都師  
範大学副教授)

会場: 小金井キャンパス 芸術・ス  
ポーツ科学系研究棟2号  
館2階第三会議室

## 資料室のご利用について

本センター資料室には、国内外の教師教育関連の文献および資料が多数所蔵されています。ご利用を希望される方は、事前に本センター事務局(下記参照)までご連絡ください。

## 編集後記

本紙1頁掲載の公開シンポジウムの記録集を4月以降に頒布いたします。ご希望の方は下記の連絡先までお問い合わせください。(上杉 嘉見)

## カリキュラムセンタースタッフ

センター長	大竹美登利(教授、家庭科教育学)
第1部門	金子真理子(准教授、教育社会学)
第2部門	岩田康之(教授、教員養成史) 上杉嘉見(准教授、メディア教育学)
第3部門	前原健二(教授、教育行政学)

編集・発行  
東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター  
編集協力  
東京学芸大学／美術・書道講座／青山司研究室／青山司／大浦恵実

\*ご不要の方はその旨を以下の連絡先にお知らせください。

184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1  
東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター  
Tel: 042-329-7776 Fax: 042-329-7786  
E-mail: curriact@u-gakugei.ac.jp  
Web: <http://www.u-gakugei.ac.jp/~curriact/index.html>

### おことわり

本紙 2 頁の記事「北京から客員教授が着任しました」の中の「日中」の表記は、著者が提出した原稿では「中日」でした。